

第 34 回 安田女子大学・安田女子短期大学 エッセイコンクール

課題部門 テーマ：生まれ変わるとすれば

優良賞「生まれ変わるとすれば」

文学部日本文学科 2 年 1 組 平野 萌央

私は近年ヒグラシの声を聞くと無性に自分が不甲斐なく、ちっぽけな人物であると痛感するようになってきました。世間を感じる哀愁よりもはるかに悲惨さを増した感情が私を支配します。夏の夕方にその鳴き声を聞くと居ても立ってもいられないほどに心臓をわしづかみされた気分になり、さらに綺麗な夕日が背景にあると、死んでしまいたいとも軽率に思ってしまうほどです。この感情は、ある日のうたたねから目を覚ましてから、心に棲みつくようになりました。

夢でありながら、生き方をすこし考えなおすきっかけとなったほどのものです。私はヒグラシの一生を夢に見ました。そのヒグラシは私であり、雄でした。

私はヒグラシとしての自我を持つ前から本能的に土の奥へ、さらに奥へと歩いていました。土の仄かな湿気は私の体を柔らかく包み込み、とても気持ちのよいものであったことを記憶しています。

土の中で生活していると、近くに同じころ生まれたヒグラシがいることが分かり、友となりました。彼はとても気さくなヒグラシで、すぐに打ち解けることができ、暗闇の生活に明るさをもたらしてくれました。地上では目ぼしいものには圧力を、欲するものには武力を、手籠めにできたら牽制をしあうような時代ですが、地下では平等が前提の、話し合いによる社会が成り立っています。ルワンダ大虐殺のような民族間の殺し合いなどは全くなく、唯一の脅威は外敵の襲来でした。足も、外敵を防ぐ手立ても持たない私たちは、ただただその襲来におびえることしかできず、襲来されたら逃げることは不可能に等しかったのです。そんな恐怖を日々心に飼いつつも、過ごした日々は楽しいものでした。

私は地上にでたあとの素晴らしい恋愛のため、自身の成長に必死に取り組みました。しかし、地上に出たあと、蛹となり殻を破るまでが厳しいことは常識だったので、地上へ向かう際、あたかも徴兵された男子のように友とできもしない再会を誓い合いました。

私が体を固めて、来るべき瞬間に備え眠りについたあとのことははっきり覚えていませんが、迎えてくれた世界のまばゆさは今でも忘れることが出来ません。土の中からは想像もつかない情報の多くは既知のものでしたが、視点が変わると全く違って見えました。

ヒグラシの雄として第一声をあげる前に、先に土から出ていたヒグラシを見かけました。そのヒグラシは特上の雌を争っているさなかにこと切れたようで、私はその始終を見ることが出来たのです。争いに敗れたヒグラシはぼとりと木から落ち、落ちてもおかしく鳴いているところ、ネコに遊ばれて粉々になってしまいました。大きなものは安物のプラスチックのように、小さなものは文字通り粉々になって彼をかたどっていました。風が吹くとさあさあとお方へ流されていく様は、かつて夢見た素晴らしい恋愛よりも遥かに素晴らしいもののように思えました。死の淵に立ってもなお本能に従い、力ある限り叫び散っていく様は、生き物としての頂点に値するように感じ、ひどく心が昂りました。夢なので都合のいい場面しか覚えていませんが、私はそのような場面に自ら出会いに行っていました。そこにあったのは現代社会にあるような男女の関係でしたが、現代社会には少ないと思われるはっききとした雄と雌という構造がありました。そのため、外道な行動など当たり前のように行われており、それを非難することはできませんでした。私は特段、敗れたものが機会をうかがい雄叫びをあげながら雌をぶんどった瞬間が好きでした。生物としての真髄を見ることができたように錯覚したからです。生命の輝きが、雌を賭けた一心不乱の生物の闘争がそこにあり、恍惚感が私を支配するのも、それに酔いしれるのも仕方のないことのようにその時は思いました。

このあたりで私は夢から覚めました。一度しか見ていないこの夢は、今でもうっすら頭に思い浮かべることが出来ます。私は虫が大の苦手で、今思い返せば身の毛もよだつような夢でしたが、この夢を見てから漠然とした物足りなさを感じるようになりました。この夢は私の何かと共鳴しているように思います。この夢を見た後、もしかしたら私はニンゲンであるこの人生で生命の輝き、すばらしさを堪能しきれないのかもしれないと感じるようになりました。生命の輝きに憧れるのか、その姿を目撃することに惹かれているのか、どちらにせよ何かに強く惹かれています。半面、このような考えを覆すことのできる人生を歩みたいとも強く思うようになりました。この文を綴っている間にもあの鳴き声は聞こえてきます。その鳴き声に必然性すら覚えます。夏の間だけですが、私はあちらに呼ばれ続けているように思うくらいあの鳴き声に縛られます。いつか、次の人生はあのように、と思うようになってしまうのかもしれない。

<講評>

この作品に垣間見ることのできる筆者の感受性には、奇妙なリアリティがある。蟬になった夢を見、蟬の一生を追体験した後に、自分の現実が相対化される。カフカの「変身」と同じようなリアリティを感じるのには不思議だが、ある種の才能の出現かもしれない。特に、夢に現れたヒグラシとしてみた自己を取り巻く世界を描写したユニークな作品である。ヒグラシとして世界をみるなかで発見した生物の真髄、生命の輝き、一方で現実世界での自己自

身の不甲斐なさを対象的に描写している。着眼のユニークさ、言葉の選びの繊細さにおいてインパクトのある作品である。加えて、令和のファンタジーともいうべき筆致がすぐれている。自分を客観視しながら女性になろうとする「女の子」の哲学といった感がまたさわやかである。少し奇を衒ったような表現が気になる所があるが、若さゆえのダイナミズムと理解したい。

エッセイコンクール審査員／富岡 治明・永田 彰子・吉目木 晴彦・大庭 由子・高田 厚